

崔鉉植氏のコメントに対する回答

金星喆（韓国 東国大学校）

コメントでは、大きく三つのことが指摘されている。第一は『大乘玄論』にはないが『大乘四論玄義記』にだけ出てくる仏性理論の大部分が本発表で言及されていないという指摘であり、第二は論文中の翻訳に、数か所、間違いがあるという指摘であり、第三は三論学で言う中道は「議論の転覆」や「二分法を超越すること」ではなく、明確な概念を持っているという指摘である。

まず第一の指摘に対して答えると次のようになる。コメンテーターは『大乘四論玄義記』には、仏性の正因以外に縁因（因、境界）と了因（因因、観智）、果（菩提）と果果（涅槃）について説明されているが、それらが省略されている」と指摘するが、筆者の論文の第Ⅱ章第1節に載せられた「表1」と「表2」、その前後の説明において、それについて簡略に紹介しているので、これは不当な指摘であると考えられる。しかし「顛倒衆生と二乗の仏性」に関する議論が論文で抜け落ちているという指摘は正しい。筆者は三論学の文献中、他を割愛して、仏性について論述する『大乘玄論』と『大乘四論玄義記』『大乘三論略章』のみを資料として研究したが、「三論学の仏性論」について完全に明らかにするためには、仏性について論ずる他のすべての文献を研究対象としなければならないであろう。そうできなかったことが本研究の限界ではあるが、研究の範囲をより広げたとしても、三論学の仏性論が「立破自在な無依無得の中道仏性論」であるという本論文の結論は変わらないものとする。

第二に、筆者の翻訳に間違いがあるという指摘のうち、一部はコメンテーターの翻訳の方が正しいと思われる。「一切是非並皆是非也。若知無は無非は無非無不非仮名為是非者」に対して、筆者は、「一切是非、並皆是非也。若知、無は無非、是非無、不非仮名、為是非者」と区切って読み、「一切の是と非は、すべてみな是であり非であろう。もし是もなく非もなく、このような無もないことがないので、仮に是や非と呼ばないことがない」という点を知れば」と翻訳したが、コメンテーターは、「一切是非、並皆是非也。若知、無は無非是、無非無不非、仮名為是非者」と区切って読み、

「一切の是と非は、すべてみな非である。もし是もなく是に非ざることもなく、非もなく非ならざることもないが、一時的に（＝仮名）是や非を認めるといふことを知れば」と翻訳する。この指摘の中、「一切是非、並皆是非也」の場合については、コメントーターの翻訳が自然なようなので受け入れることができるが、それ以外については筆者の翻訳の方が自然なようである。翻訳についての他の指摘については、どちらが正しいかの判断を読者諸賢に委ねることにしたい。

第三に『大乗四論玄義記』や『大乗玄論』で述べる中道の正因は、明確な概念もっていることとか「仏性の正因を求める論議自体を顛覆するためのものであるとか、ある理論は正しく他の理論は間違っていると排撃する是非の二分法を超越するためのものであるとは考えられない」とか、「中道が、理論と概念の領域を離れて体得するための論議ではない」というコメントーターの指摘には同意し難い。三論学において「仏性に対する議論自体を転覆することによって仏性を露わにする」という点は、論文の脚注 60、62、65、66、71 の該当する原文と、それに対する筆者の説明で確認できるであろう。そして三論学を「実践的に継承」した禅仏教においても、禅師たちは弟子たちに「仏性の概念を注入」するのではなく、破格的な言行を通して仏性に対する「議論を転覆」することにより、中道仏性を体得させようとしたことが看取できる。

仏教理論全体についても言えることであるが、特に三論学を研究する場合、多くの見解の相違が生じる理由は言語の限界のためであると考えられる。フランスの哲学者、ミシェル・フーコー（Michel Foucault: 1926-1984）は、超現実主義の画家、ルネ・マグリット（René Magritte: 1918-1967）の次のような絵を紹介しながら、言語のこのような限界性を指摘したことがある。



これはパイプではない。

パイプの下に、「これはパイプではない」という文が書かれている。一見すると、

この文章の意味は明確なようであるが、フーコーが言うように、次のような多様な解釈が可能である。

- ① 「これはパイプではなく、パイプの絵である」
- ② 「これはパイプではなく、〈これはパイプではない〉という文章である」
- ③ 「〈これはパイプではない〉という文章はパイプではない」
- ④ 「〈これはパイプではないという文章〉において、〈これ〉はパイプではない。：この絵、このキャンバス、この文章、このパイプの絵、このすべてはパイプではない」

— ミシェル・フーコー(1968), キム・ヒョン訳 (1995) p. 48. —

したがって三論学の理論に対する解釈において、多様な見解が生じるのは、論旨や理論の問題ではなく、上のような「言語の限界」に起因する可能性がある。例えば、「非有非無」という言葉がある時、これが「非有非無」を「主張」するものであるか、そうでなければ「有」や「無」を「批判」するものであるか、その文句だけでは区別されない。「無我」や「空」の場合も、「主張」になれば正しくないが、「有我」や「自性」に対する「批判」であれば正しい。筆者の論文に対するコメンテーターの理解、また、コメントに対する筆者の理解において衝突が生じるのは、その意味が違うからというよりは、言語のこのような限界によって引き起こされた誤解のためである可能性もあるように思う。

(翻訳担当：佐藤厚)